エルサルバドルでの非日常

エルサルバドルは面積が四国ほどの小さな国だ。コンパクトながらも活火山が約 25 もあり、海へのアクセスも良い。自然だけでなく、ビールやラム酒の工場見学ツアーや古代遺跡、ご当地のお祭りなど、楽しめることがたくさんある。
私は機会に恵まれ、現地で様々なアクティビティに参加した。その中から、特に思い出に残っている体験をいくつか振り返ってみたい。

ひとつは、フアユアの滝巡りだ。土日になると「フェリア・ガストロノミカ（グルメフェス)」で賑わうコーヒーの名産地フアユアには、「シエテ・カスカーダス」と呼ばれる滝群がある。フアユアの街からガイドに導かれ、森の中をグングン進んでいく。初めは滝を遠くから眺めながら写真を撮ったりしているが、進むにつれて、水との距離が近くなっていく。文字通り水に濡れながら滝を登るような場所もあり、時にはロープを使い一つひとつ滝を巡っていく。ガイドはこれが 1 つ目、ここが 3 つ目と数を伝えてくれるのだが、正直何をもって 1 つの滝としているのかわからないくらいたくさんの滝があったように思う。透き通った冷たい水を浴びながら歩くのは心地よく、スリルと驚きに満ちた道中だった。
行程の最後に訪れたのは、かつて生活に使われていたという大きく深い貯水槽。そこでは全身で水に飛び込み、泳ぐことができた。





また、コマサグアでのトレイルランニングも忘れがたい。エルサルバドルでは近年、ヌエバ・コンセプシオン・デ・アタコ、セロベルデ、コマサグアで毎年トレランの大会が開催されている。コマサグアの大会は 9 月頃に行われており、私は誘いを受けて人生で初めてトレイルラン（11km の部）に参加することになった。

もともと私は、「ゆっくりと景色を眺めることこそが山歩きの醍醐味であり、なぜ景色を走り過ぎてしまうような競技があるのだろうか」と、トレイルランに対してどこか懐疑的だった。しかし、エルサルバドルの楽天的な空気に染まったのか、「ものは試しだ」と参加を決意した。





結果としては、これまでの山歩きの中で最もつらい体験の一つとなった。しかし振り返ってみれば、登山、あるいはマラソンとはまた違った面白さを知る貴重な時間だった。変化し続ける目の前のフィールドへの持続的な集中、少し先の登り下り、コース全体の起伏の流れ――安全にかつ早くゴールするために考えるべきことが次々と現れ、飽きる暇がなく没頭できる、実にやりがいのある競技だと感じた。
しかし当時は初めての大会ということもあって心身ともに余裕がなく、ゴールは思いのほか遠く感じられたが、折り返し地点である最高点「ペニョン・デ・コマサグア」からの360 度の絶景には、一気に元気がみなぎってきた。
この大会の後にも 3 回、トレランの大会に参加したが、一歩を踏み出すとまた違った景色がみられるのだと、エルサルバドルが気づかせてくれたような気がした。

そしてもうひとつ、ウスルタン県にあるテカパ火山の火口湖「アレグリア湖」を訪れたトレッキングも味わい深かった。友人から教えてもらった現地の名物ガイドを頼り、ベルリンという街からアレグリアの街までを縦走した。道中で植物や果物の豆知識に耳を傾けながら、日本でいう地獄谷のように熱水や蒸気が激しく噴出する「クラテル・エル・ホヨン」を経由してアレグリア湖を目指す。間近で勢いよく立ち上る蒸気は見応えがあり、「生卵を持ってくれば温泉卵ができたのに」と悔やまれた。





途中、徒歩でしかたどり着けない場所に住むガイドの知り合いの家へ、突然お邪魔する場面があった。ごちそうになったグレープフルーツのような柑橘系の果物の味とともに、エルサルバドルの人々の素直でまっすぐな優しさと温かさが心に残っている。地産のコーヒーを飲み、アレグリアの街のフェリアが纏う陽気な雰囲気を肌で感じ、素晴らしい旅の記憶となった。

私が滞在した 2024 年 5 月から 2026 年 4 月は外を出歩くことにおいては非常に治安が良く、安全であったことから、多くの貴重な体験ができた。実りの多い充実した 2 年間だった。

高間　元樹（たかま　もとき）氏
2024～2026 年 JICA 海外協力隊 品質管理・生産性向上隊員 エルサルバドル・高等技術学院 ITCA-FEPADE サンタテクラに派遣。　元自動車部品メーカー品質管理業務担当。生産性向上マインド醸成を目的とし職員および学生に 5S・カイゼンの周知、教育活動に従事した。 帰国後木工家具会社に就職。